

2021年1月23日

「外国人学校の現場から見えてくるもの—多文化共生のヒント—」

私は、1990年の入管法改正の翌年1991年から南米系日系人出稼ぎ労働者の人たちと関わってきました。最初は企業での日系人労働者採用担当として、その後しばらくはボランティアとして、そして2003年に日系人労働者子弟のための南米系外国人学校を設立してから現在までです。

南米からの日系人出稼ぎ労働者たちは「定住」外国人と言われますが、当初は定住ではなく「停住」でした。その後、停住から「定住」へと、そして、むしろ移民に近いものになっていきました。当時から私は「日本は労働力が必要で労働力を受け入れたつもりでも、やってきたのはそこに生活する「人」ですから人の受け入れのための施策が必要」だと言いつけてきました。生活者として受け入れるのであれば、福祉、保険、地域とのつながり、そして子どもの教育等々整えなければならないことがたくさんあり、それらが山積みそのまま労働力として受け入れたのです。（長く定住することなく帰国するだろうという日本側の読み違い、そして、来日する労働者側もいつか帰ろうと思いつつながら帰る時期を明確に決めていないというところに原因がありました。）

現在では健康保険を持たない生徒はほとんどいませんが、2003年学校設立当時は派遣で働く親たちのほとんどが健康保険をもっていなかったため無保険の生徒が大半でした。それは、派遣会社が社会保険に未加入ということと、労働者側の問題で給料が下がるのが嫌で支払いたくないということがありました。子どもはケガをしたり熱を出したりすることが少なくないので保険がないことは非常に不安定な状態でした。年金については、2012年日本とブラジル間で保障協定が結ばれたのでブラジル人は日本で納めた年金を加算できるようになりました。

子どもたちの教育の問題は深刻で、とてもボランティアや手弁当で解決できる問題ではありません。子どもたちの成長は早いので待たなしの問題です。年齢に応じた遊びが必要と同じように年齢に応じた学習が必要です。学習の空白期間（置いてけぼり）を作ってはいけないのです。そして教育期間を過ぎたあとの社会参加（進学・就職）の問題にもつながってきます。

母国と同等の教育を行う外国人学校が日本で「学校」というステータスを持つことは非常に困難です。外国人児童、生徒を対象とする学校は各種学校としてのみ存在でき、日本の学校のような単校や専門学校と比べて様々なデメリットがあります。さらに、その各種学校になるためにも規程で自前の校地・校舎という大きな壁が存在しています。現状と

「決まり」がずれているのです。社会は時代とともに変化するので時代にあったものに変えていくべきです。(入れるものがかわれば箱を変えていかないといけないわけです。)

ムンド校では母語教育で「豊かな心」を、日本語教育で「生きる力」をモットーに、母語教育で学習を積み上げ、日本語教育によって日本社会で自己実現できる教育を行っています。外国人学校ですが、日本にある外国人学校として日本の学校の良いところを取り入れ、「ムンド式の統合政策」にチャレンジしています。生徒たちがすべて南米の外国人ですから日本の子どもたちへのアプローチとは異なりますし、保護者対応も変わります。

生活しているのは日本ですから日本語も日本のことも知らなければなりません。日本人であれば本来家庭で教えることも外国人家庭ではそれがないので、学校がそこも担うことになります。日本人との共生、日本で暮らすため等々、学校は子どもたちと日本社会、地域と結びつけるためのプラットフォームのような役割をしています。子どもたちが孤立するのではなく「自立」することを目指し様々な機会を提供しています。学校卒業時の進路として、日本での進学、就職、母国での進学と多様ですので、キャリア教育は大変です。特に中高学年で親に帯同して来日した子どもは本人の能力が高くても日本語力の問題で日本での進路が難しくなります。

様々な問題の原因の一つは日本にはそもそも「移民」という認識がなく当然「移民政策」がないことです。社会統合（インテグレーション）するためには、各省庁の縦割りがネックとなりますので、生活者である外国人を管轄して権限をもつ移民局もしくは外国人庁のような機関が必要です。

人口減少、少子化問題を抱える日本では、日本人だけで社会を構成することは難しく外国人労働力に頼らざるを得ない時代になってきています。そのためには多文化共生は避けられないものでそのための施策は不可欠です。ただ、「共生」とは決して簡単なものでもスムーズなものでなく、ドロドロしたものでお互いの我慢であったり理解であったり、歩み寄りだったり、その一つ一つを選択して決めていかなければなりません。そして、お互いの努力でより良い選択をしなければなりません。これまでの自分の経験から共生には理解して譲歩して我慢して諦める（折り合いをつける）ことで成り立つように思っています。